

私の見たブラジルの農業(第2回)

中南米技術協力専門家(元岡山県専門技術員) 田中文哉

炎天下の元旦風景

12月25日と1月1日

ここブラジルには日本のようなはっきりした四季はないがそれでも12月、1月、2月が真夏、3、4、5月が秋、6、7、8月が冬、9、10、11月が春というわけ方をしているようである。

このわけ方からいうとお正月はちょうど真夏の暑い盛りにあたっている。

一般に外国では日本ほど1月1日を祝わない習慣であると、聞いていたが、このマットグロッソ州の首都クヤバ市でも同じで、一番賑やかなのは、12月24、25日のクリスマス、つまりブラジルではこれを「ナタール」といって、昼も夜もなく教会を中心にした行事がくり広げられている。日本のクリスマスとはちょっと様子が異っていて、いづれも宗教的行事のなかで和気相々の社交ダンスなどが行われている。宗教に関係のあるものないものも、一様に“ナタール”“ナタール”といってこの日の来るのを待ちこがれている。

私達には、一向に関係はなさそうだがそれでも社交とあって25日の夜などは臨時のダンスホールに出かけてみた。老いも若きも、男女を問わず、音楽の流れに2人が相寄り踊っている姿をみると、1年の労苦も1度にふっとんでしまうこと間違いなさそうだ。ほんとうに楽しげに夜の白らむ頃まで踊っている。幸いなことに、日本のように酒に酔いつぶれてぶざまな姿をさらけ出す人が1人もいない。

皆、ほとんどの者はこの12月25日で、一応その年の一切を忘れ去って、新しい年の元旦を迎えることになる。

私は12月31日の夜はちょっと早めに床についた。真夜中である、トタンに花火の響きで目を覚まされた。夜の12時、つまり1964年を送り、1965年を迎える零時を期して一斉に教会の鐘、工場のサイレン、あらゆる音響が鳴らされ、ボンバ(bonba)という花



ブラジルの象徴コーヒーの木

火(日本の花火では5寸くらいの円筒で、根元に火をつけるとシューと20メートルくらい上にとんでいってボン、ボン、ボンと5、6発爆発する、支那では爆竹といっている)が、これまた気持ちよくあちらこちらで思い切り打ち上げられる。まるで地球が爆発するかのようだ。火星から来た火星人と地球人とが、ここを戦どと攻防戦をやっているかとまちがうようだ。

とにかく、そんなことがあるとは知る由もない私は、旧年に別れを告げ、新年を迎える爆音やサイレンの狂奏曲に目をさまして飛び起き、夜のクヤバの街を静かに見おろしていた。ああ昨日で1964年も

岡山畜産便り 1965.02

去ったのか、日本が全力を傾けたオリンピックの年もこれで終わった。いま、すでに新しい1965年が訪れたのだ。私は独り静かに北西の空…日本の彼方を振り仰いで独り言をいった。1965年もよい年であるように…。

ブラジルで味わう日本の味

ここクヤバ市には、日系コロノーとブラジルでは一般に呼ばれているが、つまり広義に言えば日系移殖者が約50家族くらいいる。独り者もちろんいるが、ここ数年のうちにアツという間に増加したということである。

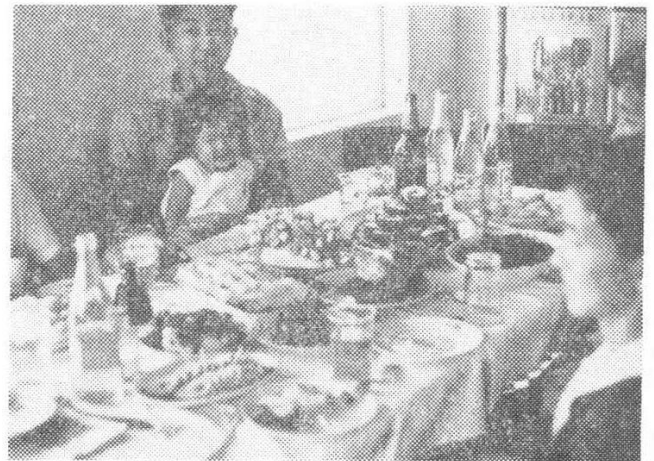
今日は、1965年、昭和40年、新年の1月1日である。私達元旦の朝早く、U氏の家に集まるよう御案内をうけたので10時を帰して参上した。相当数の人が集まっているかと思ったが、案に相違して集うもの僅かに10数名、老年の人、若年の人、数こそ少ないがいづれも真黒く日焼けした武者（つわもの）ばかりである。背広を着込んでやって来た人もいるが（もちろん私もその1人）、この暑さではとてもやりきれない、誰いうとなく上着を取りましょうということで気軽になつてテーブルについた。料理は参会者がそれぞれ持参した特別料理である。巻寿司もあれば、かまぼこもちくわもある。灘の生1本のないのが残念、ビールとシャンペンとサイダー（ブラジルではグフラナという）で祝杯をあげ、今年の活躍をちかった。

私はさらに、前のクヤバ市日本人会の会長岡村氏（茨城県出身）宅を訪問した。氏はクヤバで30有余年をくらしした長老である。この街で岡村氏を知らない人は1人もないくらい有名人である。氏の家正月料理をお目にかけよう（写真）。とにかく、サンパウロに注文すれば何でも入手出来るということである。巻寿司はもちろんのこと、牛蒡や昆布、豆腐にしめまでできているには驚いた。

この、地の果てとさえ思われているブラジルの中西部、マツグロツ州の街にも、こうして日系コロニヤがうまづたゆまぬ努力をもって生活を築きあげていったのである。これに続いて、若い人々もいまこの地で、黙々と新しい生活を打ちたてるべく活躍している。

灼熱の夏の太陽のもとに迎えた1965年の新春、私はここに新しい生命を見出した。日本の正月料理を僅かではあるが、なつかしみつつも、ここに雄々しく働き続けている日本人のいることである。かつては棄民（きみん）とまでいわれた時代に日本を去った人であったかも知れないその人が、いまこうして日本の味を忘れないで懐しみつつ裕福な生活を打ちたてているこの事実を、私はどう皆さんにお伝えしたらよいか、とても筆舌では表現できない。

日本の皆さん、私達はもう一度「ブラジルの日本人」を見直さなければなりません。いや「ブラジルの日本人」の努力と生命とを私達は忘れることはできません。



お正月のごちそう（岡村氏宅）